

教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 令和 3年 3月12日

グループ名	清瀬第三中学校チャレンジルーム	フリガナ 代表者氏名	かい まつ 金井 誠
学校名 (代表者)	清瀬市立清瀬第三中学校 (代表者：校長・金井 誠)	電話番号	(042) 493-6313
研究テーマ	外部人材を活用した不登校対策の充実		
研究期間	令和元年7月3日 から 令和3年3月25日まで		
研究結果 の概要 ※詳細は別 紙により 報告	<p>令和元年7月3日から、「学校と家庭の連携推進事業」により任用した「家庭と子供の支援員」を活用した不登校傾向のある生徒の別室指導を組織化し、以下のような対策を充実させ、不登校傾向のある生徒の学校復帰を進めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○外部人材（家庭と子供の支援員及びボランティア）を活用した別室指導（チャレンジルーム）の充実 ○チャレンジルーム担当教員を中心とした不登校の未然防止に係る取組 <p><成果></p> <ul style="list-style-type: none"> ○外部人材の活用により、チャレンジルーム担当教員の負担が減った。当初、仕事が増えるのではないかと不安も示されたが、運営が軌道に乗るにつれてそのような不安は払拭された。 ○外部人材の活用により、チャレンジルームの受け入れ生徒人数を増やすことができた。利用生徒7名のうち、チャレンジルームがなかった場合、全く登校できないと思われる生徒が6名である。 ○支援員やボランティアとの交流をとおして、生徒は様々な考え方を知り、教科学習以外の学びを得ることができた。社会性を身に付ける貴重な機会となった。 ○ボランティアが授業を行い、生徒が支援員と共に受けた。生徒は他者の考えに触れる機会をもつことができ、学びが充実した。 ○教師志望の学生ボランティアにおいては、直接中学生の指導に携わるとともに、不登校の問題にも触れることができるので、大きな学びを得ることができた。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ○チャレンジルーム利用生徒の増加やボランティア各々の環境の変化等によりボランティアに不足が生じることが懸念され、継続的にボランティアを確保していくことが大きな課題である。 ○チャレンジルーム担当以外の教員にも、その意義やボランティアの有効性等が少しずつ浸透してきているが、教材の提供やオンラインによる授業の中継等、これまでに以上に学習指導を充実させるとともに、外部人材活用の有効性について更に理解を深めさせることが課題である。 		
その他 特記事項			

別紙

研究テーマ：外部人材を活用した不登校対策の充実

1 研究テーマ設定の理由

本校における不登校生徒数及びその割合は、多少の増減はあるものの増加傾向にある。この状況を打破するため、令和元年7月「学校と家庭の連携推進事業」

本校の不登校生徒数の推移

区分	在籍生徒 総数	不登校 生徒数	不登校生徒 の割合
平成28年度	295人	7人	2.37%
平成29年度	322人	13人	4.04%
平成30年度	325人	10人	3.08%
平成31年(令和元年)度	340人	20人	5.88%

により任用した「家庭と子供の支援員」（以下「支援員」）を活用した、不登校傾向のある生徒への登校支援と別室指導を開始した。特に別室指導においては、それまで全く登校できていなかった生徒が、決まった曜日、時間に登校し、学習に取り組むようになった。このことから、不登校状態にある生徒には、別室における個別指導、または小集団学習に対するニーズがあり、学校として組織的な取組を進めていくことが不登校状態の改善、未然防止に有効であると考えた。しかし、教科の授業や部活動等以外に教員に別室指導を行わせるのは、時間的にも精神的にも負担が大き過ぎることは明白なので、支援員やボランティア（以下「V o」）等の外部人材の活用を進めていくこととした。

2 別室（「チャレンジルーム（以下「CR）」という。）指導の概要

(1) 運営方針

不登校の原因を踏まえ、教室登校を安易に促さず、生徒が安心して過ごすことができる居場所を提供し、生活、学習支援により自尊感情を高めるとともに、人と関わる機会とする。



チャレンジルームでの指導の様子

(2) 対象生徒

登校の意思はあるものの教室に入ることができない生徒、及び生活面や学習面に困り感があり、所属学級で一日を過ごすことが難しく、不登校になる兆候が見られる生徒を対象とする。

(3) 支援体制

CR時間割を作成し、CR担当教員（不登校担当教員と非常勤教員等）、及び支援員で指導にあたる時間を設定する。さらにV○を活用して全ての時間において、指導、支

チャレンジルーム時間割(利用生徒、指導者・支援者一覧)

校時		月	火	水	木	金
1 9:00~9:40	利用生徒	A		AE	E	A
	指導・支援者	支	担	担	非	非、支
2 9:50~10:40	利用生徒	AE		ACE		A
	指導・支援者	支、ボ	担	非	非	支、ボ
3 10:50~11:40	利用生徒	AE		AC		A
	指導・支援者	他、ボ	非	非	担	支、ボ
4 11:50~12:40	利用生徒	AC	CD	AC	CD	AC
	指導・支援者	非、ボ	担	担	担	非、支、ボ
給食 12:45~13:00	利用生徒	AC	BC	AC	BC	ABC
	指導・支援者	非、ボ	非	非	非	非、支、ボ
5 13:35~14:25	利用生徒	ABCF	BCF		BC	ABC
	指導・支援者	非、ボ	担、非、ボ	担	非、ボ	非、ボ
6 14:35~15:25	利用生徒	BC	BCG		BCF	ABC
	指導・支援者	非、ボ	担、非、ボ		担、非、ボ	非、ボ

担:担当教員、他:他の教員、非:非常勤教員、支:家庭と子供の支援員、ボ:ボランティア

援ができるようにした。現在6名の外部人材(支援員2名、V○4名)を活用して指導、支援にあたっている。

(4) 支援内容

利用生徒本人の希望に応じた学習指導や自習の支援を行うことを基本とし、スクールカウンセラーや特別支援教室教員の助言を受け、各々の生徒に適した活動を取り入れる。支援員は自習時の見守りや個別指導等を、V○は授業形式の学習指導やレクリエーション等での個別支援等を行い、生徒の状況に応じて柔軟に対応する。

3 実践事例

(1) 第2学年男子生徒A

小学生の時から不登校、及び保健室登校。本校入学後は2日程度登校しただけである。1年生の11月に支援員による別室支援を開始、支援員の人柄になじみ、

生徒Aのチャレンジルーム時間割

	月	火	水	木	金
1	数学		音楽		国語
2	数学	利 用 な し	家庭	利 用 な し	数学
3	美術		家庭		数学
4	英語		技術		社会
5	英語				社会
6	読書				社会

週 2 日午前中の中のみの登校を継続した。

今年度は、CR開設と同時に利用を開始した。支援員との関係は非常に良好で、登校日数、在校時間が順調に増加した。

Aが意欲的に取り組んだ技術家庭、美術等において、作品展示や評価を行うこと等が、Aの自尊感情を高めることにつながった。また、Voによる授業型の学習にも意欲を示し、他のCR利用生徒と共に学習し、積極的に関わろうとする姿勢も見られるようになっている。卒業後の進路についても意識するようになった。

月別利用状況

週当たりの 日数・時間	6月	7・8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
利用日数	2日	2日	3日						
利用時間	8時間	8時間	12時間	12時間	14時間	14時間	14時間	15時間	16時間

(2) 第2学年男子生徒B

小学校で不登校。本校入学後の5月までは通学できたが、運動会をきっかけに不登校。今年度、2年生に進級し、6月から週2日、各1時間程度のCR利用を開始した。学習意欲が高いので、徐々に登校日数、在

生徒Bのチャレンジルーム時間割

	月	火	水	木	金
1			利 用 な し		
2					
3					
4					
5	英語	英語		英語	社会
6	英語	数学		英語	社会

校時間を増やし、3学期には週4日、各2時間の利用となった。CRの学習指導方法がBに合っていたようで、他の利用生徒と一緒に指導を受けられるようになった。Voが指導する社会科において積極的に質問するなど、楽しんで学習している。所属学級の授業をオンラインで受けることや、実際に教室に入ることも選択肢の一つとして考えるようになっている。

月別利用状況

週当たりの 日数・時間	6月	7・8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
利用日数	2日	2日	3日	3日	3日	3日	3日	4日	4日
利用時間	2時間	2時間	3時間	6時間	6時間	6時間	6時間	8時間	8時間

4 成果と課題

(1) 成果

ア 外部人材の活用により、CR担当教員の負担が減った。当初、他の教員から仕事が増えるのではないかと不安も示されたが、運営が軌道に乗るにつれてそのような不安は払拭された。

イ 外部人材の活用により、CRの受け入れ生徒人数を増やすことができた。現在、利用生徒は7名、うち、CRがなかった場合、全く登校できないと思われる生徒は6名。残りの1名の生徒も、学習不振から登校意欲の低下が見られたため利用を開始したが、CRで苦手教科の個別指導を受け、自信を取り戻してCR「卒業」を希望した。

ウ 支援員やV○との交流をとおして、生徒は教員とは異なる様々な立場、考え方を知り、教科学習以外の学びを得ることができた。学ぶ意欲の向上につながり、他者との関わり方に困り感があることの多い不登校傾向のある生徒にとっては、社会性を身に付ける貴重な機会となった。

エ V○が専門性を生かして、生徒と生徒役支援員に授業を行う場面を作った。生徒にとっては支援員とはいえ同じ授業を複数で受け、他者の考えに触れる機会をもつことができ、学びが充実した。

オ 教師志望の学生V○においては、直接中学生の指導に携わることができ、また、喫緊の教育課題の一つである不登校の問題にも触れることができるので、大きな学びを得ることができた。

(2) 課題

ア V○等の確保

現在、学生V○4名の協力を得ているが、CR利用生徒の増加やV○各々の環境の変化等により、V○に不足が生じることが懸念され、継続的にV○を確保していくことが大きな課題である。学校で、継続的にV○を募集していく必要がある。

イ 教員の理解の深化と学習指導の充実

不登校状態にあった生徒がCRを利用し始めたのを目の当たりにし、担当以外の教員にもその意義やVoの有効性等が少しずつ浸透してきている。不登校状態にある生徒の、授業に出席できないことで生じるデメリットを担当以外の教員が深く理解し協力して、教材の提供やオンラインによる授業の中継等、これまで以上に学習指導を充実させるとともに、外部人材活用の有効性について理解させることが課題である。

5 まとめ

不登校状態の生徒の中には、所属学級の教室に入ることはできなくとも、別室登校ならできる生徒がいるが、教員がそのような生徒一人一人に対応することは難しい。別室対応には人的配置が必要である。今年度は、CRの全ての授業時間に教員や支援員、Voを活用して受け入れ態勢を整えた。その結果、登校できる生徒が増え、登校する日数や時間も順調に増やすことができた。所属学級と同じ教材に取り組み、評価、評定がなされた生徒もいる。解決すべき課題は多いが、外部人材を有効に活用することで、不登校の生徒が救えることは確かである。本校には、まだ救えていない不登校の生徒が十数名いる。外部人材を活用したCRの取組を継続し、一人でも多くの生徒を救っていかねばならない。